

二月、「おひとりさま」のことなど

久保浩一

或る二月、中国税理士会呉支部から講師依頼があった。

テーマは『おひとりさまの相続』である。無論、私は司法書士であるから、講義内容は、相続などに関する法制度についての解説になる。「おひとりさま」予備軍の私が、「おひとりさま」について講師依頼を受けることになるとは何とも皮肉な事だと独り言ち、謹んでお請けすることにした。

講義時間が非常に短いため（30分）、相続の基礎知識と成年後見制度は省略し、過去の講師活動で、殆ど話す機会のなかった遺贈と特別縁故者を中心に話しさせてもらうことにした。「賭け」のような気もしたが、結果、一般の参加者だけではなく、税理士にもある程度の反響はあるようだった。

ところで、「おひとりさま」にとっても、そうではない人にとっても、相続などの法制度を知ることは大切なことだが、「おひとりさま」にとっては、それ以上に、「漠たる不安」を払拭する方策を見出すことが重要課題なのではないかと思っている。

「おひとりさま」に至る過程というのは、「おひとりさま」の数だけあるのだろうけれど、「漠たる不安」を何とかしたいという気持ちは、多くの「おひとりさま」、及び「おひとりさま」予備軍が抱くところではないのだろうか。

それは、健康問題、不安定な収入、人間関係の喪失など、多岐にわたる要因が重なって起こってくるのだろう。或いは、社会資源がデッドラインに達し、誰のために残りの資源を優先的に活用するのか、といった問題が生じた場合、「おひとりさま」が最初に排除されることになるのかもしれないという不安だあってあり得る。

別にデストピアの話をしているつもりはない。結局のところ、生きるか死ぬかの極限状況においては、「社会的価値がない」とされた者とそうではない者への処遇の差異は、合理性という名のメスで寸断されていくことになるのではないか。

さて、講義を準備する際、「おひとりさま」という言葉をネットで検索していると、上野千鶴子著『おひとりさまの老後』が検索結果にあがってきた。少し気になったものの、そのときには、読んでみようとは思わなかった。

そうこうするうちに、件の講義を終え、暫く経った同年六月下旬、テレビ番組『情熱大陸』で上野氏が取り上げられている回を観て、やはり読んでみよう

と思い直し、『おひとりさまの老後』（文春文庫 2013 年 2 月 25 日第 9 刷）を読んだところ存外面白かった。

また、わりと最近になって、清水義範著『50代から上手に生きる人 ムダに生きる人』（三笠書房 2016 年 1 月 5 日第 14 刷発行）を読んだ。

同著で清水氏は、独自の視点から徒然草を読み解きつつ、人生の終盤を過ごすためのヒントを提供している。「お一人さまの老後」に関する次の記述にはハッとさせられた。

生きているってことは、雑事の連続で、退屈している暇がないはずだ。

食べるものを用意し食べたものを片づけ、ゴミを正しく分類しているだけだって半日はつぶれる。朝起きて、新聞を取ってきて、顔を洗って歯をみがいて、入れ歯をポリデントしているだけだって一時間はつぶせる。

（同著 1 章五十代からの「生き方」が格段にうまくなる章 身軽に気軽に生きてみる今日がもっと楽しくなる「あっさり生きる」極意より）

なるほど、「おひとりさま」になったとしても、終日為すべき「仕事」に追われ、その日のノルマが終われば、心地良い疲労感と共に、床に入り、明日の「仕事」に備えればよいわけである。目の前の雑事に集中することで心は無にする。さすれば、苛まれるべき不安から離れ、生老病死に纏わる難題に思慮を巡らす暇もなく、余生を過ごせるのかもしれない。

勿論、このような境地に至るには、ある程度の良い健康状態が必須条件にはなるのだろうけれど、今のところ最良の処方箋ではないかと思っている。

（初出：広島司法書士青年の会会報令和 2 年第 1 号 改題・加筆修正）